



臨床糖尿病支援ネットワーク MANO a MANO

特別号～武居 正郎先生を偲ぶ～

令和4年4月16日に享年77歳にて永眠されました武居 正郎先生を偲び、哀悼の意を表するものとして、ここに特別号を発行いたします。

武居先生の情熱に触れて 杏林大学医学部糖尿病・内分泌・代謝内科／近藤医院 近藤 琢磨

武居 正郎先生のご逝去に対し、改めてご冥福をお祈り申し上げます。

先生は、皆さんご存じのとおり、長年1型糖尿病の患者さんの診療に全身全霊を傾けてきました。サマーキャンプや1型の会(旧ヤングの会)での活動を含めて、多くの子供達、若者達の命と心の支えとなってきました。そのような中で、旧西東京臨床糖尿病研究会、さらには一般社団法人臨床糖尿病支援ネットワークにおいて、この多摩地域における糖尿病診療に携わるメディカルスタッフや若手医師の育成にも、長年我々とともに携わっていただきました。この場をお借りして深謝いたします。

私自身、1型糖尿病に関して格別の思い入れを持って診療や研究に携わってきましたため、武居先生はそのような私にとって、率直に何でも教えてもらえるメンターのような存在でした。8年前、北海道から東京に戻ってきた際、こちらでのサマーキャンプのことなどを伺っていたところ、「近藤先生のメールアドレスを教えてください」と言われ、ご連絡を差し上げてからほどなく「まだなまえはない」を毎月送っていただくようになりました。そのなかで、サマーキャンプのことやご自身の近況(旅行に行ったときのこと、時に自身の健康診断の結果など、ご自身の身体についても率直に書かれていました)、さらには糖尿病治療の新しい進歩など、様々な話題に関して、先生独自の目線でわかりやすく皆に伝えようとされていました。「まだなまえはない」をほぼ毎月継続して執筆・編集され、我々医療従事者や患者さん、そのご家族に送られていたことは本当に驚くべきことで、個人的には先生から常に情熱を分け与えていただいた気がします。

2022年4月23日土曜日の夕方、時間ギリギリで何とか間に合って武居小児科医院に到着しました。初めて伺った医院の診察室や待合室には、大勢の人が集まっていました。同業者はもちろん、おそらくは通院されていたご本人やそのご家族が多く含まれていたと思います。先生が亡くなられてから未だ日も浅く、ビックリしました、との多くの声があちらこちらで聞こえてきました。そして、皆一様にスタッフや先生のご家族に向けて「本当にありがとうございました。」とお話されていたのが今でも忘れられません。院内の展示物の中には、今年の学会発表用に準備されたポスターが張られていたのを見たときには、込み上げてくる感情を抑えられなくなりました。

最後に、「まだなまえはない」の「50年」という文章から、先生のお言葉を引用させていただきます。武居先生、本当にありがとうございました。—「50年間に多くの1型糖尿病の人たちと出会いました。立派に成人し社会人として働いている人、赤ちゃんを産んで立派に育てている人、特に医者、看護師、検査技師、医療に関係したメーカーなど医療関係で働いている人が多くいます。僕は1型糖尿病ではないですが、医師としていろいろとアドバイスをします。その結果を上手くいったとか、だめだったとかを患者さんに教えていただいています。また、このように工夫したら良かったとか、上手くいかなかったとか、僕らは患者さんたちに教えてもらっています。」—



父の思い出

足利赤十字病院 外科 武居 友子

この度は、父、武居 正郎の急逝に際しまして、臨床糖尿病支援ネットワークの皆様には、多数の患者様の受け入れをいただき、誠にありがとうございました。かかりつけの糖尿病患者様は、無事に専門の先生に引き継ぐことができました。また、「MANO a MANO」特別号を発行いただけたことと、大変光栄に存じます。寄稿のご依頼をいただきましたので、稚拙な文章ではございますが、父の思い出を書かせていただきます。

父は仕事一筋で、休日も不在、夏休みは1型糖尿病患者のキャンプを開催しておりましたので、子供のころの父の思い出はあまりありません。怒られたことはなく、私が医師になったことは非常に喜んでくれました。この数年、私が登山を趣味にするようになると、学生時代にワンダーフォーゲル部に所属していた父も一緒に行くようになり、最後に親孝行できたと考えております。2022年の正月に高尾山へ登った際には、ずいぶんと時間がかかり、父の体力の衰えを感じていたところでした。

2015年に心筋梗塞を発症して以降は慢性心不全を合併しており、2022年1月に特発性血小板減少性紫斑病に対してステロイドの内服を開始した影響もあり、心不全が増悪したようです。3月18日の診察中に心室細動を起こしましたが、診療所のスタッフの速やかな除細動と蘇生処置により、4月5日に後遺症なく退院となりました。診療所の再開に向けて準備をしておりましたが、4月16日に再び心室細動を起こし、同日、77歳にて永眠いたしました。

初回入院時に、糖尿病を含めた特殊外来の患者様にはすぐに連絡し、1カ月分の処方と紹介状をお渡しいたしました。東邦大学や武蔵野赤十字病院に勤務していた時から、40年以上にわたりかかりつけという患者様も多く、家族以上に心配していただきました。父から医師の心得のようなものを直接聞くことはありませんでしたが、患者様の様子から、父の臨床医としての在り方を改めて実感いたしました。また、本年4月小児科学会で2演題発表予定であったことに驚くとともに、臨床医である限り常に新しい知識を学び、努力を怠らない姿勢は、見習わなければならないと身の引き締まる思いであります。

残念ながら武居小児科医院は閉院とさせていただきます。幸いにも、同じ場所で小児科の開業を予定してくださる先生が見つかり、小児科という形では残すことが出来そうです。最後にはなりましたが、皆様の生前のご厚意に感謝いたしますとともに、皆様のますますのご活躍をお祈り申し上げます。

武居 正郎先生を偲んで

武蔵野赤十字病院 内分泌代謝科 杉山 徹

武居先生とお会いするようになったのは2013年に私が武蔵野赤十字病院に赴任してからです。武居先生は元々当院の小児科部長をお務めでしたが、私が当院に赴任した時は既に武居小児科医院の院長先生でした。小児科でありながら大人の1型糖尿病患者さんもたくさん診ておられ、武居先生の患者さんが妊娠され当院で出産される際には周産期の血糖管理を我々に任せていただきました。武居先生からご意見いただき、1型糖尿病患者さんの周産期血糖管理の質の向上や心のケアを目指して、当院産婦人科医師と合同で講演会・勉強会を開催したりもしました。当院で武居先生の患者さんの周産期管理をしたことをきっかけに開催するようになった産婦人科と内分泌代謝科合同の周産期糖尿病カンファは現在も月に1回開催し続けています。また、武居先生が患者さん向けに発行されていた「まだなまえはない」を私にも毎月送っていただき、内容はもちろんのこと、患者さんへ思いやメッセージを発信し続けられていたことに感銘を受けました。糖尿病関連の数々の研究会でもよくご一緒させていただき、武居先生ご自身のご講演も拝聴しましたし、別の先生の講演で武居先生が鋭い質問をされるのもよく目の当たりにしました。(私の講演で武居先生にご質問いただいたこともあります。)

2022年3月に武居先生が診療中に倒れられ、当院に救急搬送されました。武居先生自身がおっしゃったように文字通り三途の川を9割方渡っていた状態から復活され、ICUからちようど出てこられた時にお会いしました。車椅子に乗って照れ臭そうながら笑顔でお話いただきましたが、一般病床に移られてからさらに回復され、4月に元気なご様子で退院されました。とある糖尿病の研究会の世話会が4月15日の夜にオンラインで開催され、武居先生も出席され、入院された時のお話しや今後のご予定などをお話くださいました。ご逝去されたのは、そのすぐ翌朝のことでした。信じられない気持ちも大きかったですが、その時の状況をお聞きして納得もしました。お別れ会に参加させていただき、多くの患者さんやそのご家族や医療関係の方々から涙とともにお別れされているのを拝見し、多くの方に尊敬され、愛された先生だったのだと改めて感じました。個人的には、1型糖尿病という疾患に対する考え方、患者さんに対する姿勢など、多くを学ばせていただいたと思います。

最後になりますが、武居先生に大変感謝するとともに、ご冥福を心よりお祈り致します。

武居先生を偲んで

イムス三芳総合病院 貴田岡 正史

近藤 甲斐夫先生、植木 彬夫先生と当法人の先達や仲間がお亡くなりになり、当法人の活動に長年従事してきた立場からも非常に寂しい思いを感じているさなかの訃報でした。武居先生にもご相談しながら行った当法人運営の新体制構築が一段落して、ある意味でほっとしているタイミングでもありました。一旦入院された後に、復帰の工程表ともいえる結果的には最終号となった「まだなまえはない」をメールで受けとった間もなくの突然の知らせに愕然とし、また武居先生の存在の大きさをあらためて実感した瞬間でした。

故武居先生は1型糖尿病関連の活動では長年にわたり、唯一無二の存在でした。多くの方がこのことに関して思い出を語られると思いますので、私は当法人への武居先生のご貢献を中心に記憶をたどりたいと思います。

武居先生は任意団体としての西東京臨床糖尿病研究会の立ち上げから主要メンバーとしてご活躍でした。近藤 甲斐夫先生や伊藤 眞一先生という歴代の代表世話人を支え、持ち前の温厚な性格で円滑な運営の要となり後進を育ててくださりました。2002年のNPO法人化の際は本法人の主たる事業である例会担当理事として、例会運営のシステム作りとその展開について多大な貢献をしていただきました。近藤 甲斐夫先生の後任として監事にご就任してからは当法人の活動の監査役として活動の適正化に貢献され、一般社団法人に移行後も監事を引き続き務められました。今年度からの執行部一新とそれに伴う新体制構築に際してはよき相談役を務めていただきました。また、今年度からは顕彰委員会委員長として後進を温かい目で評価していただけると期待されておりました。

最後までお世話になりましたこと深く感謝すると共にご冥福をお祈りいたします。

武居先生の思いで

かんの内科 菅野 一男

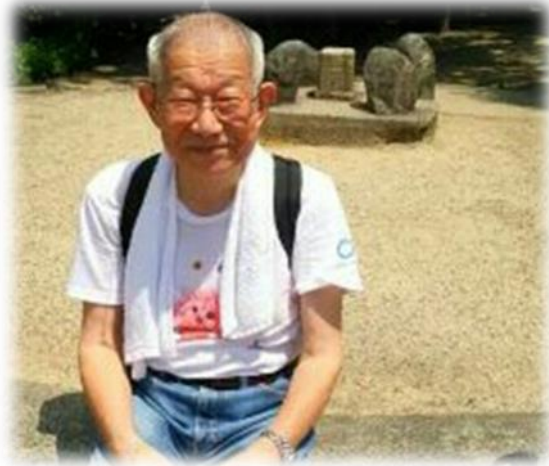
1994年に私が武蔵野日赤に赴任してからしばらく、武居先生の存在は意識にはなかったのですが、いつの頃からともなく、糖尿病診療について少しずつ話をするようになりました。夜間低血糖の対応に困っていた時、武居先生が、寝る前に腹持ちのいい牛乳を飲ませるといいと教えてくれたことがありました。今にして思えば、当たり前ですが、牛乳はほぼ半分は炭水化物で、そこに脂質とタンパク質がバランスよく含まれているので、血糖の上昇が比較的穏やかで低血糖を防ぐにはもってこいの食品だとわかります。その当時はFGMもなく血糖変動についての情報がまだ乏しい時代でしたが、1型糖尿病の患者さんを多く診ていた武居先生から多くのことを教えてもらいながら、付き合いが深まってきました。

武居先生のところで治療していた、小児発症の糖尿病患者さんで、お子さんを生み育てている方たちが当院に来院していますが、この方たちは武居先生が、子供のころからしっかりと診療を続け、人生を伴走してきたのだと改めて感じています。

武居先生の残っていたパウチしたメモを、職員の方が持ってきてくれました。このメモを見ながら武居先生は子供たちと向き合っていたことがうかがわれます。そのメモは今、私の診察机の右の小物入れの中に入っていて、私も自戒を込めて、適宜確認しています。

ならぬもの十訓

1. 忘れてはならぬもの「感謝」
 2. 言ってはならぬもの「愚痴」
 3. 曲げてはならぬもの「つむじ」
 4. 起こしてはならぬもの「短気」
 5. 叩いてはならぬもの「人の頭」
 6. 失ってはならぬもの「信用」
 7. 笑ってはならぬもの「人の落ち度」
 8. 持ってはならぬもの「ねたみ」
 9. 捨ててはならぬもの「義理人情」
 10. 乗ってはならぬもの「口車」
- 「智、仁、勇」



武居先生を悼む

伊藤内科小児科クリニック 伊藤 真一

●先生と僕は昭和19年生まれと同級生今年77歳です。僕は開業の側武蔵野日赤の内科非常勤医師として42年間現在も勤めております。先生が日赤在籍の時はいつの頃からか内科と小児科と科こそ違いますが、同じ糖尿病を専門にしていたことから特に親しくさせていただきました。

●それ以上に僕にとって大切なことは僕の一人娘が生まれてからずっと娘の主治医をお願いしたことです。医師である自分も一人娘にはとって全く頼りない父です。不安になると娘のことについて例え深夜でもすぐに電話させていただきました。武居先生はただただ優しくも接するだけでなくある時は厳しく接していただきました。頼りない父親の僕を叱咤激励していただきホッとして眠りについたことをつい先日のことのように思い出されます。

●武居先生が開業してからは僕の不得意な感染についてちょっとでも疑問を持つとすぐに先生にお電話して色々教えていただきました。インフルエンザ今はコロナについて最も頼りになる相談相手の同級生でした。

●今年3月18日武居先生が危篤と菅野先生から連絡がありました。しかし数日後武居先生の持ち前の気力で「自宅に帰ることになった」と明るい声で先生から直接電話をいただきました。よかったと涙がとまりませんでした。また二人で相談し合える！

ところがその直後菅野先生から————同級生として武居先生が果たすことができなかつた何かを、僕は残されたものとして得、僕もそちらに行ったら武居先生にお渡しする覚悟です。

●明日その娘の誕生日です。

●合掌



武居 正郎先生へ

慶應義塾大学医学部 腎臓内分泌代謝内科 専任講師 伊藤 新

1型糖尿病患者として、そして同業の糖尿病を専門とする医師もやっている私は誰よりも先生に御恩を受けた人間だと自負しております。発症して入院した小学4年生の夏、東邦大学大橋病院小児科病棟のベッドサイドに会いに来てくださったあの日から約30年間、私の人生の8割近くもの長い間、私だけでなく両親や家族をもお導きくださいました。

挙げればきりがありませんが、例えば、当時サマーキャンプ長もされており、18歳の現役や医学部卒業するまで毎年参加いたしました。医療業界と全く縁のない一族でしたが毎月先生と会うことで医師になりたいと思うようになりました。たまたま親父が代理受診したときに内部進学のある慶應を薦めてくださったおかげで、我が家の家族会議で親父から慶應に行けと言われたことは人生の最大のターニングポイントでした。

先生が開業されたときに診療所に呼んでいただいて中をご案内いただいたときに、椅子のない待合室や床暖房やA1cがすぐ出る機器を嬉しそうに自慢していたこと、武蔵野日赤の研修医時代に小児科研修で先生の診療所で研修したときに、注射の名人として患者さんに紹介して下さったり、診療所の朝の掃除や昼休憩のときの雰囲気などをよく覚えております。医師として患者に向けての言葉をお聞かせいただくだけでなく、先生の経歴やご家族ができるころの話や、(昭和時代の)医師の働き方の話、ご自身の体調のお話もたくさん聞かせていただきました。

先生の医院で開かれたお別れ会では先生が使っていた赤い聴診器をいただいてきました。見るたびに先生に教えていただいたことを思い出しながらこれからも全力で職務を全うしたいと思います。

先生の患者になって32年目 伊藤 新

まだなまえはない、そして、ファミリーキャンプ

管理栄養士 福島 芳子

「武居先生、今はどこにいらっしゃいますか」

ファミリーキャンプの夜、暗闇の中に先生の豪快な笑い声が響き、満天の星が輝いていました。お星様になって、私達を見守ってくれているのでしょうか。

2004年、小児・思春期糖尿病シンポジウムの帰り道、「まだなまえはない」の話題になり、「誰か栄養士さん、食事のこと書いてくれないかな」「ふくちゃん、書いたら」のやり取りで53号から執筆参加させていただき感謝です。

診療所での1型の会で、子供達だけでなく、成人、家族の為のファミリーキャンプが必要だという思いから、試行錯誤の中、2005年ファミリーキャンプがスタートしました。最初は、キャンパー1人でした。年々、参加者も増えました。宿泊所も、山梨の「おいしい学校」になり、夜遅くまでミーティングの時を過ごしました。翌日は、武居先生の友達の家を開放してくださって、子供達は森の散策、大人達はバーベキューの準備。私達の望んでいたファミリーキャンプになりました。参加したお父様が、「家の子、あんなに食べてもいいですか。」美味しそうに食べる我が子の様子に感動していました。先生は、いつもの笑顔でした。私の「まだなまえはない」「ファミリーキャンプ」も、とくに10年が過ぎていました。毎月のように、「ふくちゃん書けた?」「明日の朝まで待ってください」こんな会話も、今となっては懐かしいです。

先生は、いつ、どんな時も、私達に新しいことを考え、先に進めるように元気をくれました。300号も書きたかったです。



武居先生から学んだこと

駒沢女子大学／緑風荘病院 西村 一弘

武居 正郎先生には30年ほど前に先生の母校である東邦医大病院で栄養に関する講義をさせていただいたことをきっかけに、西東京臨床糖尿病研究会の時代からご開業された現在まで、小児糖尿病患者の療養指導についてたくさんのことを学ばせていただきました。私の前職であり、現在も毎週非常勤で栄養室の運営顧問として勤務させていただいている社会福祉法人緑風会の酒井理事長(緑風荘病院院長)が、武居先生の大学の後輩に当たり、武蔵野赤十字病院の小児科にご勤務されている頃から、子供の朝食抜き学力低下の問題やTVが与える生活習慣病の問題など貴重な研究も学ばせていただきました。

私が最もお世話になったのは1型糖尿病患者本人と家族の会である「つぼみの会」での活動です。サマーキャンプをはじめ、家族講習会、会員向け勉強会など様々な活動と一緒にさせていただき、時には厳しく時には優しく接し、サマーキャンプの参加児童や卒業生から慕われるお人柄や、ご家族からの厚い信頼を間近で拝見させていただき、医療者としての姿勢もたくさん学ばせていただきました。栄養スタッフは毎年ボランティア学生を募って、サマーキャンプを運営しており、新規学生には1型糖尿病のことを初回のミーティングの際に講義で指導していました。その際にも診療所の休日に緑風荘病院迄お越しいただき、無償でご講演いただき、学生教育もさせていただきました。先生のご講義の内容は、全て子供たちのことを思った熱い想いが込められたもので、学生達も毎回聞き入っていたことを思い出します。先生の足元にも及びませんが、これからも先生の子供たちへの想いを教育の場で学生に伝えていきたいと思っています。

発行元

一般社団法人 臨床糖尿病支援ネットワーク事務局
〒185-0012
国分寺市本町2-23-5 ラフィネ込山No.3-802
TEL:042(322)7468 FAX:042(322)7478
<https://www.cad-net.jp/>
Email:w_tokyo_dm_net@crest.ocn.ne.jp

編集後記



武居先生を偲ぶ特別号として、多くの先生方にご執筆いただきましたこと、心より感謝申し上げます。常に患者さんのことを思い、ご尽力されていた武居先生。先生にもうお会いできないと思うと悲しくてなりません、先生の情熱を私たち会員一人ひとりが少しでも継承していけたらと思っております。武居先生、本当にありがとうございました。合掌(広報委員 佐藤 文紀)



一般社団法人

臨床糖尿病支援ネットワーク

Clinical Assistance of Diabetes Network